

6 木	3 人	5 人	6 人	9 人	4 口	9 口	6 女	5 女	8 寸
案 アン	以 イ	位 クイ らい	依 エイ	偉 エイ らい	囧 かこむ	囧 イ かこむ	威 イ	委 イ	尉 イ
／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
説文解字	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡	睡虎地秦簡
隸書肉筆	隸書石碑	隸書石碑	隸書石碑	隸書石碑	隸書石碑	隸書石碑	隸書石碑	隸書石碑	隸書石碑
前206～68	前219頃を100に著す	前219頃を100に著す	前219頃を100に著す	前219頃を100に著す	前219頃を100に著す	前219頃を100に著す	前219頃を100に著す	前219頃を100に著す	前219頃を100に著す
148～186	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之
317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之	317～主に王羲之
386～534	628～665	628～665	628～665	628～665	628～665	628～665	628～665	628～665	628～665
説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837	説文の字体700頃～837
上代日本	上代日本	上代日本	上代日本	上代日本	上代日本	上代日本	上代日本	上代日本	上代日本
平安中期	平安中期	平安中期	平安中期	平安中期	平安中期	平安中期	平安中期	平安中期	平安中期
江戸	江戸	江戸	江戸	江戸	江戸	江戸	江戸	江戸	江戸
康熙字典	康熙字典	康熙字典	康熙字典	康熙字典	康熙字典	康熙字典	康熙字典	康熙字典	康熙字典
1935	1935	1935	1935	1935	1935	1935	1935	1935	1935
1949	1949	1949	1949	1949	1949	1949	1949	1949	1949
簡体字1964	簡体字1964	簡体字1964	簡体字1964	簡体字1964	簡体字1964	簡体字1964	簡体字1964	簡体字1964	簡体字1964

【案（桼）】この字は横に伸ばしたい衝動にかられるところが四箇所ある。それをどれか一つに抑制して他を狭くするのがバランス良く書くコツ。どれを長くするのかは隸書を参考にとすると良い。欧陽詢、行書、平安、江戸とも見事。それに比べて教育漢字は……。

【以（目巳）】「目」は、どの字源解説も、刃先の丸いすきの形象、という解釈はほぼ一致している。

「目」に「人」がついて「以」になったとする字書もあるが、睡虎地秦簡や馬王堆の字形を見るとそうはおもえない。刃を下に向けたものが「目」。刃を左に向けたものが「以」で右の柄の部分が「人」になったんじゃないだろうか。「目」の上下を反転して刃先を上に向けたものが「巳」で「やめる」の意味が加わったのだらう。

【偉（偉）】康熙字典、当用漢字字体表、常用漢字は、旁の上から二本目の横線が右に飛び出している。文部省活字は康熙字典に倣っていない。中国常用は草書の字体。

【囧（囧）】現在の字体は江戸時代からの略字。

【委】横に伸ばしたい衝動を抑制して伸ばすのを一箇所にするのが漢字を格好良く書くコツ。この字の場合は長くするのは「女」の横線なので「禾」の左右を払っちゃいけない。康熙字典は明朝体なのでやむをえないとしても、正字、文部省活字、教科書体のいずれも「禾」の左右を払って

る。どれを伸ばしたらいいか迷ったときは、隸書の字体を参考にとするとよい。

【威】金文では「女」の上に横線はない。この横線がなぜ付いたのかはわからない。

【尉】手（又）に火のし（アイロン）を持っている、というのが字源のほぼ一致した解釈だが、説文よりも古い戦国古璽も睡虎地秦簡も右側は「又（手）」ではなく「寸」だ。「又」に点がついて「寸」になったんじゃないかと、もともと「寸」だったのだ。「寸」は「手（又）」に「一」を加え、脈をはかる位置を示す、というのは字源のほぼ一致した解釈だが、「尉」が古くから「寸」を含む字だから、「尉」に含まれる「寸」は単体の「寸」の意味ではない。想像の域をでないが「尉」に含まれる「寸」は何かをつかもうとして親指を開いた形で「一」は親指ではないだろうか。

左側は「尸＋二＋火」で「尸＋示」じゃない。隸書には「火」を「れつか」のように四つの点で書いている字体もある。「二＋火」が「示」になり、「禾」のように解釈されたのだ。北魏楷書にも四点で書いている字体がある。

説文の字体を明朝体にするのと「尉」になるはずだが「尉」が先に載っていて「尉」は古文としてある。「慰」は康熙字典では「慰」の字体が先に載っていて、「慰」を同字としている。これは一貫性にかける扱いだ。